

D. H. ローレンスと『恋しい息子たち』

井 上 義 夫

D. H. ローレンスの文学に於る『恋しい息子たち』(*Sons and Lovers*) の特殊な意味を、大半の批評家はローレンスとその母親の關係に即して語ってきた。即ちこの關係が、母親と息子の常の關係というよりは、二人の異性の恋愛關係に比せられるものであった為、他の女性へのローレンスの愛に不能の影が兆した、その経緯や徐々に翳りの度合を深める作者自身の心理が、『恋しい息子たち』に於ては事細かに描かれていたと云われてきた。無論、同様なことを立言するなかにも自ずから多様さはある、この愛の不能を生涯に亙るものとして言えば、J. M. マリの *Son of Woman* のような評論となり、逆に、この不能はのちのローレンスの文学には無關係であると主張する Martin Jarret-kerr のような批評家も現われたわけである。しかし異なるところ多いこれらの批評も、『恋しい息子たち』の本質次元を、母親と息子の關係に見出すという点では相通じるものがある。かねてから私は、所謂 Oedips complex の一具体例として『恋しい息子たち』を語ることに少なからぬ疑問を抱いてきた。その理由の一つとしては、この小説の文体が不自然なまでに冷たく、その冷たさは一見妥当に見える解釈を退けつつ、それ自身何事かを物語るように思えたからであり、亦一つには、仮にローレンスの意図が Oedips complex から逃れられぬ自己の青年期を語ることにあったと解釈した場合には、『恋しい息子たち』を上梓した後、この作家が「母親」を捨て一層大きな「宿命」に身を委ねた「機縁」の問題が、彼の文学に即しては一向に明きらかにならぬからであった。既に述べたように、J. M. マリは、ローレンスの complex は生涯消えぬ性格のものであると断じたのであるが、まこと母親の死や Frieda Weekley との邂逅で消えた仮そめの complex であれば、伝記作家はともかくも批評家はこれを無視して差支えなく、J. M. マリがこのコムプレクスを執拗に追うたことには、その私的な意図の perversity を別としても、一筋の批評原理が貫かれていた。マリの結論は丁度私のそれと正反対であるとはいえ、一条の光を求めた作家を評するに当っては批評家はこの光の在処から説かねばならないという点で、*Son of Woman* には私らの心すべき一抹の真実があると思っている。しかしローレンスは『恋しい息子たち』をくぐって、もはやコムプレクスとて届かぬ観想の深みにわけ入ったのであるから、この作品そのものにローレンスの運命がひと際深まるか転回するその兆を見ずして、単に

脱皮した抜殻を言うても私らには詮ないことである。無論この作家が、母親への愛と恋人への性愛の狭間であがく一人の青年の「物語」を書いたことに疑いの余地はない。同様に、ローレンスの青年期に彼の母親が大きな位置を占めたことも「事実」である。ただ私には、さような事実⁽¹⁾に依拠して『恋しい息子たち』を分析するとき漏れ落ちてゆく文学者のこころが批評家の意識の合理よりも貴いという、当然の前提を亦結論とするような批評だけが真実であると思えるから、ローレンスの心を辿る道すじとして『恋しい息子たち』を語ろうと思うのである。

『恋しい息子たち』の文体が硬質で冷たいということは、ローレンスが、遠くから語るように書いたということである。逆に言えば、作者は文章の中にはいないということである。もし文そのものの情感に頼りながらこれに即して自己の思うところを記したのであれば、『恋しい息子たち』の文体は『侵犯者』(*The Trespasser*)の文体になった筈である。ローレンスは、『侵犯者』を改稿していた頃、ほとんど時を同じくして『ポール・モレル』(*Paul Morel*)と題された『恋しい息子たち』の初期草稿を書き下していたのであるから、両者の文体に著しい類似性が生まれたとしても不思議のないところである。なるほど両者とも比較的短い、簡潔な文体で書かれている点で共通している。が、文章と文章との、文章と作者との粘着性には大きな隔りがある。私が冷たい文体と言うのは、文章に対する作者の愛著のようなものが感じられぬということである。

『ポール・モレル』の初期草稿を読んで、ポールの恋人ミリアムのモデルとなったジェシー・チェンバースは次のように感じたという。

「作中人物は皆、不毛な関係に縛られ、逃れる道は無いようであった。不自然な緊張感で、私は押しつけられるような気がした。この小説を書くことは根気の要ることであった。私は確信しているのだが、ローレンスはこれを書くのに、自らを強制してかからねばならなかった。彼の作風の著しい特徴と私が認めはじめていたあの自発性⁽¹⁾は、その片鱗も見出せぬほどであった。……」

ローレンスは彼女のこの感想をきいた後『ポール・モレル』を書き改めたのであるが、私には、完成した作品と初期草稿との間に本質的な相違はなかったと思える。『恋しい息子たち』も、鋭った鉄粉が磁極の周りに像を為すような、刺々しい小説である。作中人物が小説の中で生き、作者の情思が作品に滲みて自ずから作品が成る、ローレンスに独自の作風はこの小説にはない。年代的に言えば、『恋しい息子たち』の後に続くのは『虹』(*The Rainbow*)、『恋する女』(*Women in Love*)であるが、ローレンスその人の情動の躍る様

(1) E. T., *D. H. Lawrence : A Personal Record*, Janathan Cape Ltd., 1939, pp. 190.

は、これら小説の背後に明瞭に浮び、読者の眼に強く印象づけられるところである。同様なことは侵犯者についても語り得ることであって、ローレンス自身の言葉として、

「これは容易く読んでもらっては困る作品です。気軽に考えて貰うわけにはゆかぬということです。一人の人間の裸の自己が余りに明瞭に出ている。私はこの小説に私自身を投入しすぎた、最も感じやすい脈打っている自分を描きすぎたようです。十把ひとからげの阿呆たちの眼にとまるのだと思うと、この作品自体に嫌悪を覚えるほど⁽²⁾です。」

という昂った調子の一節が、E. ガーネットに宛てた手紙に見出される。ローレンスのこの言葉も、この作家と作品との濃密な関係を窺せ、ローレンスの長編小説の全体的統一性が作者の情感の持続性に等質であった事実を示唆するものであるが、『恋しい息子たち』には、作品を統制するローレンスの素直な情感の動きはない。ジェシー・チェンバースがここに不自然な緊張を見、自発性の欠如を感得したのは、ローレンスの天分を掘り当てたこの女性の媚眼であった。しかしこの不自然さの意味を尋ねるには、『恋しい息子たち』は彼女にとってむしろ私的な意味を有しすぎたようである。この小説は、ローレンスの側から言えば十年にも及んだこの女性への愛著を断つことになった小説であるし、ジェシー・チェンバースにはローレンスへの愛を断念するきっかけを作った小説であった。E. T. という匿名で彼女の書いたローレンス伝には、彼女自身をモデルとしたミリアムの描き方が公平を欠くものであった為にこの女性がいかに惨めに傷つき、それが亦二人の離反をどのように促すことになったかという、不幸な「愛」の結末が誌されている。「ローレンスにとって、母親は至高の存在でなければならなかった。この崇高さを守るためには、どのような不誠実も許されるのだった。……『恋しい息子たち』の中で、ローレンスは彼の母親に勝利の月桂冠を授けたのである。」と、苦々しい口調で彼女は回顧している。彼女も又、『恋しい息子たち』をローレンスとその母親の異常な愛の観点から視、彼女とローレンスの間に萌した優しさがこの愛に蹂躪される様を見てこれを恨んだのであるが、何故ローレンスがジェシー・チェンバースを歪め作中のミリアムに仕立て上げねばならなかったか、その理由は彼女の読んだところとは別所にあったと私には思える。というのも作者は己れ自らをも歪め、これをポールという作中人物として、ためらうことなく冷淡に、突き放すように描いているからである。

『恋しい息子たち』は自伝的小説であると言われている。作者自身もそう呼び、多くの

(2) Aldous Huxley, *The Letters of D. H. Lawrence*, Heinemann, 1956, pp. 21.

(3) *op. cit.* D. H. Lawrence: *A Personal Record*, pp. 201—202.

批評家もそう語るのであるが、仮にこの言葉に、ポールという作中の人物はローレンス自身であるという認識が前提されているのなら、私達はむしろ作者以外の人物をモデルとした『侵犯者』のような小説を自伝的小説と呼んだ方がよい。ポールという若者は、丁度ミリアムがジェシー・チェンバースでなかったように、ローレンスではなかったのである。殊更こういう言い方をすると逆説めいて響くかも知れない。が、『恋しい息子たち』という小説の本質次元は、自らの半生を素材とした小説を書くに、当の自己自身をも消し去るほど冷淡に書いた作者の特殊な創作動機によってしかこれを明かすことはできぬのである。

この冷淡さを示すものとしては次のような例がある。『恋しい息子たち』のなかで、物心ついた頃のポールの性向が初めて語られる箇所である。

「『アラベラを生贄にしよう、燃やしてしまおう。』とポールが言った。姉のアニーはぞっとしたが、面白がってもちた。ポールがどうするか見たかった。ポールは煉瓦で祭壇を作り、アラベラの体から鉋くずを引っぱり出し、窪んだ顔に臘の切れ端を押しつけた。石油を少し注ぎ、火をつけた。臘は溶けて、壊れたアラベラの額から滴り落ちた。汗のように焰のなかに落ちる臘を、邪まな満足感でポールは見ていた。頓馬で大きい人形が燃えている間、彼は物も言わず悦んでいた。最後に、燃えさしの中から黒焦げになった手脚を掻き出し、ポールは石で粉々に砕いた。⁽⁴⁾……」

こういう惨い話を、作者はおそらく冷静な心で書いていたのである。ローレンスの記憶を迎れば、壊れた人形を焼いた場面も浮んだのであろうが、現実に人形の燃える様を見た幼少の頃の作者はこころ優しい少年であった筈である。『恋しい息子たち』の不自然さは、異常なほど優しいポールと不自然に惨いポールが同一の小説に並列される、作者の意図の測り難さとして別様に言い替えることもできる。確言しうることは、自己の半生を振り返るに、作者は特殊な眼でこれを振り返ったということである。最初からこの作者には、優しさも惨さもそなえた一個の人格としてポールを描く意図はなかったのである。

ジェシー・チェンバースも、初期草稿の読後感として、「ローレンスが余りにも現実から距離を保って書いているのに驚いた。」と述べている。このことは彼女には初期草稿の改稿後も気がかりであったと見え、重ねて次のように述懐している。

「……私の人生のうちで最も深く貴重であったものが、微妙に歪められているのを見ていたとき、私にとって一筋の光となったものは、ローレンスは彼の例 (case) を誇張して書いたのだという認識であった。母親の愛と息子の献身という彼の叙事詩が、

(4) D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*, Heinemann, Phoenix Edition, 1969, pp. 57-58.

いつか、別の角度から、彼の窮極の絶望から視られるときが来るであろうという思い
 (5)
 であった。……」

ローレンスへの愛は断つ他にすべないと知ったとき、激しく動いたこの女性の心に一条の直観の光が射したと感得されるような、既述した伝記の終章の、何の勇みもない文章である。彼女はここで Oedipus Complex という簡便な観点よりは、ローレンスという一人の人間の切迫した心として『恋しい息子たち』を視る方途を予感したように思える。この方途を言うに、彼の「窮極の絶望」という言葉を用いれば既に自明な、ローレンスの塞がれた心がジェシー・チェンバースには自ずから伝わっていたのである。この心の大方のところは、ローレンスにじかに接したことのない私らも了知できる。例えば、『恋しい息子たち』を執筆していた同じ時期にヘレン・コークに宛てた手紙の、「確かに少し冷淡になりました。人生は卑小で大らかさに欠けたものに思えたのです。……本当に大らかで美しい冒険は唯一つ、死だけが残されているとしか思えなかった」⁽⁶⁾という類の言葉が表徴する心である。ただジェシー・チェンバースには、開塞した心に解放を穿つにローレンスがいかなる道にすぎたか、「窮極の絶望」に煽られて動いたローレンスの心の方角が解せなかったようである。『恋しい息子たち』の文体が、絶望したローレンスの鋭った心の像である以上に、この作家のどのような決意の暗示であったかという、強靱なこの作家の精神の動きが解せなかった。私らはしかし文学作品を作家の心と同視して隠せぬ例をローレンスに持つと信じるから、既に引用した文中の「祭壇」や「生贄」という言葉から、『恋しい息子たち』の文体の冷たさが、惨いもののみを真実と思おうとしたこの作家の心の反映であることを予感するのである。別様に言えば、「焰の中に滴り落ちる臓を、邪まな満足感でポールは見ていた」と書くとき、この作家には、かような文章によらずには展げぬ、ジェシー・チェンバースが「窮極の絶望」と呼んだ心と、かような文章がその惨さの表象である大いなる実体に身を託寄して解放されたいと願う心の双方があった、ということである。

『恋しい息子たち』の第一章、殆んどこの小説の冒頭に位置するところに、興味深い一節がある。これは、小説全体の色合いを言うている文章である。

『……モレル夫人は、事態は何も変らぬのであろうかと思いつつ家にはいった。今ではもう、何も好転せぬのであろうと気づき始めていた。青春の頃は遠い世界のような気がし、今こうやってボトムズの裏庭をとぼとぼ歩いている人間が、十年前、シアネスの波止場を軽やかに駆けた人間と同一の人であったか訝んだ。『この私が、あの頃と

(5) *op. cit.*, D. H. Lawrence: *A Personal Record*, pp. 204.

(6) *op. cit.*, *The Letters of D. H. Lawrence*, pp. 7.

何の関係があるのだろう』と彼女は独りつぶやいた。『それに、いまのことだって皆……。私が産もうとしている子供さえ……。まるで、私など無視されているみたいだ。』

時折^{ライフ}人生は人を掴み、人の身体をも運び去り、人の生涯を閉じる。にもかかわらず実在感に欠け、人を言わばかすめ去るときがある。

『私は待っている、そう、私は待っている。でも私の待っているものは、永遠に訪れないものだ。』と、彼女は独りつぶやいていた。……』⁽⁷⁾

この文章が興味深いというのは、モレル夫人の人生を透しみて、そこに人生とは異なるものの動きが感得されるからである。別様に言えば、一人の人間を動かすものは当の本人ではないという予感がするからである。あたかも煉瓦の祭壇で生贄として焼かれ、幼少のポールの惨い眼にその燃え様をさらした人形に似て、この母親も「人生」という祭壇の火に煽られる一の受動的存在にしか過ぎぬ。引用した文章には、この母親の思惑から「人生」がはぐれ、先駆けてゆく、不安とも諦めとも不審の念ともつかぬ感情が表情されている。彼女は既に、自己の半生がゆえ知らぬ或る力に流されたことを、漠然と意識しているのである。「この私が、あの頃と何の関係があるのだろう」という言葉も、「まるで私など無視されているみたいだ」という言葉も、「シアネスの波止場を軽やかに駆けた」一人の娘が年若い鉱夫に出会い、結婚して子供を生みながら、日毎夫への憎しみを育て、薄汚れた生活に歯がみして耐えた10年の歳月が言わせた言葉である。この母親が人生と思う日々が、彼女の日々ではなく何ものかの自己顕示であった不可思議を言うた言葉である。この母親が、「私の待っているものは決して訪れないのだ」と独語するとき、ローレンスの心を占めたものは、日常の現実と現実を動かすものとの存在の位相差であったはずである。人生そのものの中に人生ではない実体が潜み、人生がその仮象と実体の二層に剥がれる事実であった。

しかし人生を実体と仮象に分つというだけであれば、『恋しい息子たち』に先立つ『白い孔雀』(*The White Peacock*)と『侵犯者』で、ローレンスは既にその半ばを終えていたのである。『恋しい息子たち』の特殊な意味を明きらめるには、生まれて間もないポールとその母親が登場する第2章の、印象深い場面をその糸口とせねばならない。作者の創作動機が真直ぐに暗示された、これは簡便な例である。

「陽は沈みかけていた。晴れた夕暮れにはいつも、ダービシヤの山は赤い夕陽で燦然と輝いた。……幼な児は母親の膝で、光の方に這おうとして身をよじっていた。モレル夫人はうつむいて幼児を見た。夫に対する感情の所為で、彼女はこの子を災厄のように怖れていた。今彼女には奇妙な感情が湧いた。この子供が虚弱であるか、或いは

(7) *op. cit.*, *Sons and Lovers*, pp. 6.

奇型であるとしても云うように、心は重い気分沈んでいった。が、幼児は全く健康そうであった。ただ彼女は、その額の奇妙な皺と、眼の特異な重みに気づいた。それは何か、痛みのようなものを理解しようと試みている風であった。

『この子は何か考えてるみたいだね——とても哀しいことを——』とカーク夫人が言った。

……魂の奥底で、モレル夫人は彼女と夫が罪人であるように思った。幼児は母親を見ていた。青い眼は母親と同じであった。しかしその視線は既に、自らの魂のある一点を萎えさせたものを知っているかのように、重く、寂かであった。……彼女は夫を愛してはいなかった。この児が生を受け、生まれてくることも望んでいなかった。にもかかわらず今の児は母親に抱かれ、母親の心臓を引っぱっている。……

再びモレル夫人は、山際に赤くたゆたう夕陽に気づいた。突然彼女は幼児を抱きあげ、両腕を伸ばしながら叫んだ。『さあ、見てごらん、さあ！』——彼女は深紅の脈打つ太陽に我が児をさし出し、救われたようにさえ思った。しかし幼児が小さな手を伸ばすのを視て、再び幼児を抱きしめ、この幼な児をもと居た場所に返そうとした衝動を恥じた。『この子が生きたら、この子はどうなるのだろうか、何になるのだろうか。』と彼女はひとり呟いていた。⁽⁸⁾

ローレンスはここで、全編の道すじを指したのである。小説全体を読了してこの箇所に戻ると、ポールの半生がこの瞬間に逆流する奇妙な感慨に打たれる。彼はこの瞬間から後、時間的には二十数年間の半生を生きたのであるが、この半生は、出生の瞬間に戻るための半生であったように見える。例えば『恋しい息子たち』最終章で、母親を追い死の「闇」に赴こうとしたポールが、ふと踵をめぐらし「おぼろにさざめき輝く街」に歩み去った結末の場面は、幼児のいのちをいのち以前の場所に戻す衝動に駆られたモレル夫人が、再びわが子を抱きしめその行く末を思うた『恋しい息子たち』冒頭のこの場面に著しく類似している。結末が発端につながる特殊な作品構成の意味としてここで指摘しうることは、ローレンスは『恋しい息子たち』を書くことによって、「脈動する太陽」にさし出された幼児のような自己自身の原生に戻ろうとしたということである。しかも作者の自覚として、彼の新しいいのちの原生には、この幼児を抱いた母親はもはや存在しなかったのである。

『恋しい息子たち』という小説が、ポールのみならずその母親の半生の記述をもって成立する複合した構成を持つことは、ローレンスの意図にとって必須の要件であった。というのも、この作家が新しい生に戻るために、彼の母の生涯は終わらねばならなかったから

(8) *ibid.*, pp. 36—37.

である。しかし母親の死とローレンスの新たないのちとの関連を、私はいささかも母親との愛の絆からのこの作家の解放という意味では思っていないのである。私の言及しているものは、母親とポールの愛の絆のことではない。ローレンスも又、この絆を糾^{あざな}う愛以外の存在を知りはじめていた。私の念頭にあるのは、母親と息子を繋ぐ強靱な一筋のより糸であり、この強靱な糸も断ち切れることを知ったとき、ローレンスは母親も含め全ての人間的なものから離れたのである。にもかかわらず、『恋しい息子たち』を書いたこの作家の心にその母親の占める位置の大きかったことは、一筋に人生を貫くものの存在をローレンスに教えたものが、彼の母の生と、そして死であったからである。

『恋しい息子たち』の中でも、ポールの母親が長い死の床につき、徐々に死にはじめていながら、頑強に死を拒み、生に執着する様子の描かれている箇所は、最も緊迫した場面の一つであるが、これを単々と描写するローレンスの冷静さは、既にこの作家の心に兆した非情な観想を暗示している。例えば次のような文章がある。

「母親が病床にいるとき、ポールは時折母親が過去のことを思い出しているのだと知った。口元が徐々に固く結ばれ、真一文字になった。彼女は、身体をひき裂いて発せられるあの死声を叫ばないために、わが身を固くこわばらせているのだった。何週間も続いた、全く孤独で頑強な母の口元を、ポールは決して忘れなかった。……

ポールはあたかも、彼のいのちが少しずつ壊されて行くような気がした。涙が突然湧き出ることがあった。彼は家を出、駐車場の方に駆けて行った。涙が舗道に落ちた。……戻ってくると気分が悪かった。手足がぶるぶる震えた。が、彼はそれが何であるか問うことはなかった。彼の心は分析したり、理解しようとはしなかった。ただ身を委ねて (submit) 目を閉じ、過ぎてゆくのを待った。

母親も同じであった。痛みや、モルヒネや、明日のことは思った。だが死のことを考えることは殆んどなかった。近づいていることは知っていた。死に屈せねばならなかった。しかし死に哀願し、死に親しもうとはしなかった。盲目に、固く眼を閉じ見えぬまま、死の戸口に押しやられていた。何日かが過ぎ、幾週間が過ぎ、そうして又何
(9)
何カ月か過ぎた……」

おそらくローレンス自身は、常に眼のあたりにしながら終^{つい}ぞ視えることのなかった何ものかの形相を視ていたのである。惨めな母の生涯と、死の病床に寄りそったものの姿を、眼を凝して視ていた。人生に存在しながら、人の意志を受けつけぬ力が、己れを全うする様を視ていた。submit という語が用いられるのも、まことに身を委ねるより他に人の為すべとてないからである。しかし「固く結ばれた母の口元」の印象濃い心像が暗示するこ

(9) *ibid.*, pp. 386.

とは、ローレンスは「死」を視、「死」に身を委ねたのではなかったということである。ここに私達は、『恋しい息子たち』とこれに先立つ前二作との異りを、ローレンスの母が彼に与えたいのちへの意志として理解することができるのである。

例えば『侵犯者』のシグモンドは、生の実相が死であり、人の真実が人の外部の自然であるという認識に魅せられ、発作的に死の道を辿った、一時期のローレンスの思いをそのままに象ったような作中の人物であった。この作中人物は、人間存在の真実を外対象である自然の真実として見出した、言いかえれば、人間存在の実相は人の生活領域には見出せなかったから、『侵犯者』に現われた人生や生活は、雑多で瑣末なものとして描かれているに過ぎなかった。シグモンドが潤うのは、自然の原素に触れるときのみであり、この原素は人生とは別の次元に存在するものであった。ローレンスがこの小説の登場人物を生活の場から離しワイト島に置いたことには、自然と人との係わりを純粹に示そうとした意図とは別に、作者が未だ人生そのものに即しては自然と人を共有する或る「存在」の実像を写し得なかったという事情があった。世界の实相は「闇」の動めきとして感じる他に感得する術はなく、人の生活の潤いは、闇を陽と思う人の眼の仮象であった。

「私には、日は透明でしなびている。日の花卉を通して、私には闇が視える。だが彼に、日々は新鮮な風鈴草だ。その中を喜々として、蜂のように動いている。

しかしこの海原と空のあいだに、ふるえているものは闇だ。私の魂を満たす同一の闇だ。私には、生の只中に死の滲み入る様が視える。実体を支える、影が視える……」⁽¹⁰⁾
『侵犯者』のシグモンドが不気味な物思いにふけていたとき、人の世の現実⁽¹⁰⁾は透明な皮膚に似たもの、その背後に暗い死を擁する東の間の明であった。それ故に作者には、シグモンドの家庭の様は、能うかぎり手短かに、しかも醜く書けば事足りたのである。しかし『恋しい息子たち』のローレンスには、むしろかりそめに見える仮象から実体を求める、じかの人生の道に就く決意があった。はかないものとして捨てる以前に、はかないものに通うた俊敏さを迎える心があったのである。

「『お母さん、もし僕が死なねばならないのなら、僕は死ぬよ、死のうとするよ。』

『この私が、死ななくてもいいとも思っているのかい。お前がいつでも、死にたいときに死ねるとでも思っているのかい?』⁽¹¹⁾

『恋しい息子たち』の、母親の言葉の澄んだ響きとその冷たさは、人のいのちと人生を、作者がどのような心の厳しさで思っていたかを暗示している。同時に、母親の死がローレンスに、死ではなく、生の厳肅さを振返らせるものであったことを私らに予感させる。母親の

(10) *id.*, *The Trespasser*, The Albatross, pp.154.

(11) *op. cit.*, *Sons and Lovers*, pp.388.

死に際を見たローレンスには、何ごとも好転せぬこの母の惨めな生涯とその苦おしい死に様の中に、彼女を生み屠ったものを見届ける決意があった。東の間の人の生涯を弄びながら、人のいのちの虚妄によらずには自らは現れ得ぬ、永劫なるものの存在を見る決意があった。『恋しい息子たち』はこの決意の書であり、ローレンスが見届けたものは、人のいのちに内在しながらそれ自体死相を帯びたもの、即ち運命であったと思える。

「母の青い眼は、静かに寺院を見上げていた。再び母は、ポールの手が届かぬところにいるようであった。気高く、青く、空に聳る寺院の永遠の休止の中にあるもの、宿命に似たものが母の眼に映っていた。在るものそれは在る。ポールの若々しい意志の力も改めることはできなかった。彼は母の顔を見た。まだ赤味を帯びた柔く新鮮な皮膚、小皺のある眼尻や、固く、幾分窪んだ臉、常に幻滅を噛み殺すように固く結ばれた口元に、いま遂に宿命を見たかのような、同じ永遠の色が漂っていた。ポールは全身の力をこめ、彼の魂でそれに抗った。⁽¹²⁾」

『恋しい息子たち』に於てローレンスが為そうとしたことは、一つには母親の生涯に現れた宿命を作者自身の温い心を殺しつつ浮彫ることであった。同時に彼は、この母の宿命をポールに見せることによって、ポールという若者の半生にも運命の影が落ちたことを自ら自覚しようとした。作中で、宿命の存在に耐える母親の姿の象徴的な現れが固く結んだ口元であるとすれば、その出生の瞬間に刻みこまれていたポールの額の皺は、この若者の宿命の象である。作者は物語の終りまで執拗にこの皺に言及しており、片時もこれを離れまいとする頑なな意志のようなものすら感じられる。なるほどジェシー・チェンバースの言葉通り、この小説の行間には「不自然な緊張感」が漲っている。しかし作中人物を不自然なまでに固く縛ったものが作者の作意であるとしても、作者自身を縛ったものは彼の運命の非情であった。彼はただ、彼に出来ることは自らの宿命を研ぎ磨すことであると知り、この宿命の命ずるままに自己の半生を振返らざるを得なかったのである。そのときローレンスが殺さねばならなかったものは、彼の若年期に於て顕著な天性の *tenderness* であった。『恋しい息子たち』に於てローレンスは、自己の内部に通う動かし難いものに依拠して、ポールという若者を宿命に煽られる受動的物体として描き、彼の内面の優しさを軟弱なものとして戯化した感がある。母親の死の予感に動転するポールの振舞いや、この思いから逃れる道をクレアラという女性に求めるポールの行為を、作者は惨たらしく突き放して書いている。彼の半生に現れた人間的な優しさを暖い筆で記しつつ、その半生の陰影を悉く視とどけることは、作者の意図にはなかったのである。温い心を剝りながら、運命の糸の通うところではこれを際立たせねばならなかった。ミリアムが惨らしい扱いを受け

(12) *ibid.*; pp. 240.

た為ジェシー・チェンバースは傷ついたのであるが、ローレンスには「優しさ」が傷つける場合を避けるしか道はなかったとも思える。この二人の愛は抜きさしならぬ局面に来ており、“Assuming the Burden”という詩の、「私は傷ついた／彼女の眼の／瞳のなかに痛みを／顕わなその魂の恐怖に／無垢の残骸を認めて」という詩句につづく、「私が傷つけた／その彼女を優しく愛して」⁽¹³⁾という言葉などは、優しさもまた惨い⁽¹³⁾と知り、むしろ人を超絶した苛酷さへの道を予感するローレンスの思いを彷彿とさせるものがある。彼にはただ、傷つくか否かに拘らず彼女はやはり生き続けるのだという冷たい認識にすぎって、一切の人間的な煩いを離れる以外に、自らの過去の淀みから抜け出る方途はなかったのである。

『恋しい息子たち』という小説の本質次元を母親と息子の関係に求めることに私が異議をさしはさむのは、この小説が、運命の相として書かれたポールとその母親の半生記であるからである。この両者の愛著は、ポールとミリアム、或いはクレアラの間の愛著に比較すれば特殊ではあるが、ポールという人間、或いはモレル夫人という人間の各々の宿命の深層に照せば本質的なことではない。丁度、「気高い寺院の永遠の休止」が母親の青い眼に宿命の相を映したとき、傍にいたポールが母の宿命からはじき出されたように、母と子の異常な愛著も、宿命の冷厳さの前では無に帰するのである。「お前はいつでも死にたいときに死ぬるとでも思っているのかい」という言葉は、人はそれぞれ異なる宿命を追わねばならぬという思いの込められた言葉である。「魂は在る。魂はひとりである」という、数年後、『カンガルー』(Kangaroo)の中で語られた認識の芽は、『恋しい息子たち』に既に孕まれていた。それ故に私は、母親の死ぬ「解放」と題された章、或いは「遺棄」という最終章の意味を、単に母親からのポールの解放というよりは広く解するのである。例えば、「クレアラが傍にいるとき、ポールは囚人のように感じた。思うままに深く息のできぬような、何もかが蔽いかぶさっているような気がした。」⁽¹⁴⁾という文章に窺えるごとく、母親の死の予感からの逃れ道として選んだクレアラとの性愛に於てさえ、ポールには既に自らの存在を縛るこの女性との結びつきから逃れたいと思う心があった。「解放」の章で、ポールはクレアラと別れるのであるが、『恋しい息子たち』を書いた作者の意図は、母親の死後この若者がミリアムとも訣別するとき明瞭となる。再びポールは彼女の元に戻るであろうというミリアムの思惑とは逆に、この物語の最後の場面、最も緊迫した、ローレンスの常の文体で書かれた場面は次のような文章で始っている。

(13) *id.*, *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, Heinemann, 1967, .pp.886.

(14) *op. cit.*, *Sons and Lovers*, pp.359.

「ポールはミリアムと握手し、ミリアムの従妹の家の戸口で別れた。彼女に背を向けたとき、最後の絆が消えたように感じた。電車の外の、街は、鉄道の湾曲した彼方にのび、灯りの水平な煙であった。その街の彼方には田園、そうして更なる街々の、くすぶるような灯りの斑点と、海、夜であった。が、ポールには居場所⁽¹⁵⁾はなかった。何処に立とうと、彼はひとりで立った。その彼の胸元から、口から、果てない空間がとび出、彼の背後に遍く在った。通りを急ぐ人々は、ポールを包む空間の何の支障にもならなかった。彼らは、足音と声の聴える小さな影の集まりであった。しかしその影の中には、同じ夜と、そうして同じ静寂があった。……」

ローレンスはここで、人と人との全ゆる結びつきからポールを解き放ったのである、「解放」とはそういう意味である。ポールの背後にあるものは、無限の空間、彼の胸、口から吐き出た空間の無限のみであった。道ゆく人々も、彼のいる空間には触れて通らぬ、夜と静寂の人々でしかない。この一連の奇妙な言葉が何故ローレンスの筆から自然に湧き出るかは、以前論じたこともありここに反復することは控える。ただ、この空間に溶け入ることが死を意味することは、続いて闇の空間が母親の連想に於て語られ、「母は夜へ旅立ったのである」という言葉の現われることから明きらかである。いまポールの周囲には、広漠たる夜と静寂がある。彼は無論死を選ぶことができるのである。

「が、違う。ポールは決して屈服せぬであろう。すばやく踵を返し、彼は街の黄金^{きん}の燐光をさして歩んだ。その拳は固く、口元はしっかり結ばれていた。彼はもはや、母を追い、あの闇の方向には向かわぬであろう。かすかにさざめき輝く街に、ポールは足早に歩んでいった。」⁽¹⁶⁾

『恋しい息子たち』の終結部の文章であるが、この文章を念頭において、私はローレンスがこの小説によって自己自身の原生に立ち戻ろうとしたと云うたのである。何故ならポールには、「脈動する太陽」にさし出された幼児期の自己のいのちとして生きる以外に、他に生きるすべはなかったからである。作中の言葉通り、「ポールには居場所⁽¹⁵⁾がなかった。」人の世に戻るとき、彼は新たに、はじめて生を受けた人間として戻る以外に道はなかったのである。しかもこのとき、ポールを繋ぎとめた一切の人の絆は、母親のそれも、クレアラ、ミリアムとの絆も断たれていたのである。言わばローレンスは、自らの自覚としてこれらの絆を断ち、過去の愛しい人々らの灰燼から甦るために、愛著ある者らと自らの半生を、『恋しい息子たち』という祭壇で焼いたのである。丁度ポールが黒焦げの人形を砕いたごとく、ローレンスは彼の半生を「生贄」として焼き、しかるのちにその記憶を

(15) *ibid.*, pp. 419.

(16) *ibid.*, pp. 420.

悉く葬ったのであった。彼はこの後、何ものにも囚われぬ一切に自由な幼児として生き始めるであろう。しかし無論、彼が生きる限り、一筋に研ぎすまされた宿命の光だけは残る。それは殆んどこの作家に、いのちがあるということと同義だったからである。

*

『恋しい息子たち』は、二年余りの歳月を費して書かれた小説であるが、この期間の終り近くに、ローレンスは生涯の妻となったフリーダと邂逅している。引用した終結の文章などは、おそらくこの女性と巡り合っていなければ書けなかった文章であり、ポールが「かすかにさざめき輝く街に」足早に歩み去った裏には、そういう事情もあったのである。事実ローレンスは彼の新しい人生に於て新たな自己を見出し、その体験から出た深い叡智の言葉を私達に残した。が、フリーダと出会ったローレンスはもはや、ジェシー・チェンバースの心に温いしるしを刻んだ、素直に優しいローレンスではなかった。表面のことはいまは言わない。フリーダによる伝記を見れば、ローレンスの優しさは絶えなかったことは解る。私はただ、『恋しい息子たち』に於てこの作家に優しさを断たせた同じ運命の苛酷さが、新しき生に向ったローレンスとフリーダの愛を殺ぐほどに、峻烈な人生を彼に強いた、その非情なものの変わらぬ現れを言うのである。晩年のローレンスに会ったA. ハクスレーが「⁽¹⁷⁾怖しいほどの悲しみ」をその表情に認めたとき、彼はローレンスの上層よりは深い、人の世のものではない相を思うたはずである。比較的初期の作品である『恋しい息子たち』にもそれが見える。『虹』に至っては、この冷たい相に血が通いながら、もっと寂かに、しかも大きくうねる様が見えるのである。

（筆者の住所：東京都三鷹市下連雀1-9-24 第1水月荘9号）

(17) *op. cit.*, Aldous Huxley, "Introduction to *The Letters of D. H. Lawrence*", pp. XXXIII.